



Contents

- ・【巻頭エッセー】「この音符は何に見えるか？」…金子恵 ●表紙
- ・【Parlando Interview】音楽の授業を通して子どもに笑顔を
酒井美恵子先生 きき手・小関康幸 ●2～5
- ・館長室へようこそ ㊸…古川 聡 / 雑誌の部屋 ㊹ ●6
- ・【私のおすすめ】…根本晃帆 岡本さやか ●7
- ・Information ●8

Parlando

ぱるらんど 「語りかけるように歌う」という意味の楽想記号です

No.296

【巻頭エッセー】「この音符は何に見えるか？」

金子恵

音楽は人をたくさんの感動へと導いてくれる。人は何故、音楽を聴き演奏するのか。

私にとって音楽は“マジック”。毎日“マジック”と共にいるのだからもう面白くてたまらないし止められない、中毒症のようなものです。しかし、面白い面白い、と言って過ごせるはずもなく、はまれればまるほど神秘の世界に引きずり込まれてゆく。そちらの世界は予想以上の苦しみ、ある時は快楽、非日常的な感覚を味わい、多くの謎が生まれる。そんな謎を解き明かしてくれる場所に図書館があります。私の学生時代、まだインターネットのような便利なものはなく、ひたすら図書館に通って楽譜を借りたりレコードを聴いたりしていました。LPレコードは、聴きたい所を何回も何回も針を落とし聴いているうちにそこだけ傷っぽくなって針が飛んでしまうこともありました。絵を見ることも好きで美術の分厚い本を見ては心が癒されていましたし、とても静かで居心地の良い場所でもありました。

最近「命」についての本が読みたくなくて「命」と入れて検索して出会った本があります。『リレートーク 言葉の力 人間の力』と題する、それぞれ違う分野で活躍する4人の著名な方々の対談が綴られている本です。その中に今は左手のピアニストとして活躍している舘野泉さんがいたので、余計に興味を持って読みました。壮絶な人生を送ってきた舘野さんのお話に引き込まれると同時に、対談の相手の松居直さん（福音書書店創業、月刊物語絵本『こどものとも』を創刊）のお話で「言葉というのは目で読むものではない。

耳で聞いて話をするという、オーラル文化、声の文化、それがまず大切です。その次に‘読む’とか‘書く’とかリテラシーというのがくっついてくる」とあり‘言葉’を‘音符’に置き換えたならこれは正に音楽に言える事だ、と共感を覚えました。

私のハンガリー留学時代の恩師ラドシュ先生の言葉が甦ります。モーツァルトの作品でのレッスンのこと、私が弾き始めて8小節したら止められて、こうおっしゃった。「君は何を考えて弾いているのか、僕には全く理解できない。君にはこの音符は何に見えるか？」その時の私には答える力がなく逆に「先生は何に見えるのですか？」と聞くと「自分にはこの音符の一つ一つが大切な命に見える。道を歩いている人たちを見なさい。誰一人として同じ顔をしている人はいないでしょ？皆、違うパーソナリティを持つ顔、命なんだ。不必要な命は一つだってないのだから音符も同じだよ。君は随分音を殺しているね」とラドシュ先生は言った。衝撃の言葉にショックを受け、それから私は1週間ピアノの音を出すことができませんでしたが、音楽をすることの意味を心底知った気がして感極まりない感動に震えました。音符は目で読むものではない。耳で聞いて歌うことがまず大切で、そこに心が動くと息が吹きかかり演奏したくなるのだと思います。どんな音もパーソナリティを持った大切な「命」なのだから。

●かねこ めぐみ 本学准教授(ピアノ)

*『言葉の力人間の力』舘野泉(ほか)著 佼成出版社 2012
請求記号●J123-683